臨床心理学は病気を治すというよりも、成長を支援するものなのです。

香川県立観音寺第一高等学校教諭
博士（医学）　臨床心理士

岡田 倫代

Michiyo Okada

おかだ　みちよ

1999年　香川県立観音寺第一高等学校定時制課程 英語教諭
2000年　香川大学教育学部大学院修士課程修了
2010年　香川大学医学部大学院博士課程修了

現在、香川大学医学部協力研究員、四国学院大学非常勤講師、香川大学非常勤講師、丸亀市発達障害児支援協働事業推進委員、観音寺市就学前児童親子相談事業及び発達障害児巡回相談事業相談員、香川県警察親子カウンセリングアドバイザー

教師を続けながら教育学と医学の大学院で学ぶ

岡田倫代先生は観音寺第一高校の定時制で英語を教える現役の教師であり、臨床心理士として香川県内の教育機関で教育上の困難を抱える子どもたちの支援を行う相談員、香川県警親子カウンセリングアドバイザー、そして本学や四国学院大学での非常勤講師も勤められています。教育相談や進路指導などで生徒に寄り添う岡田先生の姿は２０１０年にＮＨＫ『プロフェッショナル 仕事の流儀』でも取り上げられ、大きな反響を呼びました。

生徒の揺れる心に接し、学校心理を勉強したいと香川大学の修士課程で学び始めたのが約10年前。「教師としてずっと実践の場にいたのですが、大学院で学ぶことで理論が実践の中に入ってくる実感がありました」。中でも病院研修では、子どもたちが計り知れないストレスを抱え、その結果脳の中でさまざまなことが起こり、身体に影響を及ぼしていると理解したと言います。「心で起こっていることは、すべて脳で起こっている」という医師の言葉にハッとしたのもこの頃。「心理学では診断することを見立てというのですが、医学的知識があると見立てがより正確になります。見立てが正しいとクライアントをより深く理解でき、対応も望ましいものに変わります」。医師ではなく教師として、できることは何だろう。辿り着いた答えは「社会環境の中で人の健康を支える要因を増やすこと」でした。

ＷＨＯ（世界保健機構）は、健康は「身体的に、社会的に、精神的にバランスのとれた状態」だと定義しています。学校も含めた地域社会に働きかけることで、子どもたちが健康に暮らせる社会環境をつくりたい。岡田先生は香川大学医学部社会環境病態医学専攻の博士課程に進みました。

医学の理論に裏打ちされたカウンセリング

博士課程では教員、医師、看護系大学の教授、心理判定員など新たな仲間との出会いがありました。勉強会などでお互いに学び、刺激しあう存在。仲間や先生とは今でも交流があり、「つながりは私の財産」とおっしゃいます。

来春、医学部に新しく臨床心理学科が開設されることについて、岡田先生はどう思っておられるのでしょうか？「現在の臨床心理学のベースには精神医学がありません。単なるカウンセリングと、理論に裏打ちされたカウンセリングとは、時間も手間もクライエントの負担も違いますよね。さらに、いま医療現場ではチームでの対応が重要視されていますが、医学を理解したパラメディカルとしての心理援助職は、クライエント本人だけではなく、家族や本人を取り巻く社会に対して積極的に関わっていくことができるのではないでしょうか」。教師の立場でも、ある程度の児童思春期精神医学の全体像を知ることは大切だと考えておられるそう。「学校では、生徒の状態やその背景・問題の迅速で正確なアセスメント、関係専門機関とのスムーズな連携、しなやかな対応の3つが必要です」。医学がその助けになることは言うまでもありません。

最後に、進路指導を担当されている岡田先生から、高校生のみなさんにメッセージをいただきました。「大学は自分の夢を叶えるための手段。たくさん迷って悩んでほしい。でも単に悩むのではなく、進路について少しでも興味のあるところから調べてはどうでしょう。みなさんが使いこなしているネットや、今まで培ってきた人間関係も情報源にして。そうすれば進路が自然と見えてきて目標が定まります。そこからすべてが始まります」。保護者の方には…「お子さんをほめて、自信をつけさせてほしいです。自信がつけば勉強は後からついてきます」。岡田先生の、人の美しさや潜在力を信じる気持ちが伝わるメッセージです。